

武蔵野日曜集会

無量愛

――ヨハネ伝第3章16～36節――

1967年9月3日（武蔵野）

小池辰雄

イエス・キリスト自身が最大の賜物 キリストを受けとれば永遠の生命 罪意識の決定版は十字架 絶対恩寵の赦し 愛の光の世界にいよいよ入って行く 闇を光に変える光 上より来るもの 聞くも語るも祈り心 十字架は霊界に入るとき 関門 無量寿無量光とは聖霊が充滿している事態

【ヨハネ3・16～36】

16 それ神はその独子^{ひとりご}を賜^{たま}うほどに世を愛し給えり、すべて彼を信ずる者の亡びずして永遠の生命を得んためなり。17 神その子を世に遣^{つかわ}したまえるは、世を審^{さば}かん為にあらず、彼によりて世の救われん為なり。18 彼を信ずる者は審^{さば}かれず、信ぜぬ者は既に審^{さば}かれたり。神の独子の名を信ぜざりし故なり。19 その審^{さば}判^{はん}は是なり。光、世にきたりしに、人その行為^{おこない}の悪しきによりて、光よりも暗黒^{くわい}を愛したり。20 すべて悪を行う者は光をにくみて光に来らず、その行為の責められざらん為なり。21 真^{まこと}をおこなう者は光にきたる、その行為の神によりて行いたることの顕れん為なり。

22 この後イエス、弟子たちとユダヤの地にゆき、其処にともに留りてバプテスマを施し給う。23 ヨハネもサリムに近きアイノンにてバプテスマを施したり、其処に水おおくある故なり。人々つどい来りてバプテスマを受く。24 ヨハネは未だ獄^{いよく}に入れられざりしなり。25 ここにヨハネの弟子たちと一人のユダヤ人との間に、潔^{けがれ}につきて論起こりたれば、26 彼らヨハネの許^{もと}に來^{きた}りて言う『ラビ、視よ、汝とともにヨルダンの彼方にありし者、なんじが証せし者、バプテスマを施し、人みなその許に往くなり』27 ヨハネ答えて言う『人は天より与えられずば、何をも受くること能わず。28 「我はキリストにあらず」唯「その前に遣されたる者なり」と我が言いしことに就きて証する者は、汝らなり。29 新婦^{はなよめ}をもつ者は新郎^{はなむこ}なり、新郎の友は、立ちて新郎の声をきくとき、大いに喜ぶ、この我が歡喜^{よろこび}いま満ちたり。30 彼は必ず盛んになり、我は衰^{おとろ}へし』

31 上より来るものは凡ての物の上にあり、地より出づるものは地の者にし



て、その語ることも地のことなり。天より来るものは凡ての物の上にあり。
32 彼その見しところ、聞きしところを証したもうに、誰もその証を受けず。
33 その証を受ける者は、印して神を真なりとす。34 神の遣し給いし者は神の
言をかたる、神、御霊を賜いて量りなければなり。35 父は御子を愛し、万物
をその手に委ね給えり。36 御子を信する者は永遠の生命をもち、御子に従わ
ぬ者は生命を見ず、反って神の怒その上に止るなり。

● イエス・キリスト自身が最大の賜物

3章16節は有名な言葉です。

16 それ神はその独子を賜うほどに世を愛し給えり、すべて彼を信する者の亡
びずして永遠の生命を得んためなり。

ある意味において、この一句はキリスト教、福音を表現していると言つて決して過言でない、
聖書の中の最も重要な句の一つです。

「神はその独子を賜うほどに世を愛した」

という。

「世を愛するな」

なんていう言葉もある。同じヨハネの書簡の中にいろいろ反対な言葉が出ている。たとえば、
ヨハネ第一書の2章15節に、

「15 なんじら世をも世にある物をも愛すな。人もし世を愛せば、御父を愛する
愛その衷になし。16 おおよそ世にあるもの、即ち肉の欲・眼の欲・所有の誇
りなどは、御父より出づるにあらず、世より出づるなり。17 世と世の欲とは
過ぎ往く、然れど神の御意をおこなう者は永遠に存るなり。」(ヨハネ一2・15
～17)

とある。

「世を愛するな」

ということと

「世を愛せよ」

ということとは決して矛盾しない。両方とも真理なんです。真理というものは、ただ言葉
の上の解釈では解らない。

世は愛すべからざるものなんです。なんとすれば、私たちは世に生きている。ヨハネ伝
で「世」というのは「罪の世」ということです。暗黒の世ということ。罪が支配している
ところの世、それは「憎めり」と。愛すべからざるもので、それは私たちを滅びに持つて
いくものですから、世を愛して、即ち世と契つて一緒にの気持になつたらば滅びに行くから、
そんな愛をしたら大変なはなしだということが「世を愛するな」ということ。お前も滅び



てしまうぞということ。「世に与くみするな」ということです、「世を愛するな」ということは。ところが、そういった自然的な愛、直線的な愛を持つていくと、即ち「エロース」とか「フィロース」とかいうような意味の愛を持つていったら、滅びてしまう。「アガペー」という愛は――事実、神さまは世を愛した――神さまの愛は別な種類の愛ですから、愛すべからざるものを愛する。愛すべからざるものを愛するために、そこにひとつの――北森さんではないが――痛みがあるわけです。神の痛みがある。

けれども、それはただ「痛み」というような表現ではまだ足りないと思われ、そこに私が申し上げている「砕け」ということがある。即ち、神がただ痛みをもつて愛したのでは、これは私はある意味においてセンチメンタリズムだと思う。痛みはもちろんこの場合にあるのですが、しかし、その痛みを越えて、もつと本当に、直接ではないが、しかし直接の自然愛よりももっと凄惨な白熱の愛がある。それは砕けをもつてするところの愛である。即ち、

「独子を賜ったほどに」

というのがこの砕けなんです。

キリストを罪のために、我々の世の罪のために、それを処分する。世を処分したら世は滅びですから、キリストを身代わりにしたわけです。これが贖罪くわんざいです。キリストを砕いて、独子を――義なるキリストは砕かれるべきものではない――砕かれるべからざるものを砕いたという絶対矛盾をなさる。これが即ち絶対矛盾でありながら同時に一番深い愛である。救いなんです。

救われたから信ずる。正にその通りなんです。「信じれば救われる」ではない。もちろん、救いという事実は、私たちが神を知らずまた神に逆らっていたときに、既に救いという事実はもはや完了している。それはパウロも言っている通りです。

「我らがまだ神に逆らいしときに神が私たちを救った」

と。万人に救いは既に完了的に配備されてある。それを受けとるか受けとらないかということだけが我々に残されてある。即ち、世を愛して独子を十字架につけてしまった。罪を負わせてしまった。神の子に罪を負わせて、罪なき者に罪を負わせてしまった。これが即ち、

「世を愛し給えり」

という内容です。

「神はその独子を賜いしほどに」

と。我々一人びとりに賜っている。我々の賜物たまものは何かというと、なにか霊的な賜物ではない。イエス・キリスト自身が最大の賜物です。キリストという賜物。「賜いし」というのは、私たちはキリストをもらってしまっているわけです、無条件に。

「さあ、とれ。このキリストを受けとりなさい」

と言うのに、みんな受けとらないだけのはなしです。そのことがどういうことであるかは、



今日学ぶところに出てきます。

「キリストを無条件に、あるがままそのままでもいいから、受けとりなさい。この贖罪の事実、この永遠の生命の事実を受けとりなさい

と言って、

「神はその独子^{ひとりご}を賜ったほどに世を愛した」

と。これは完了の事実を、神さまが既に現した事実を語っている。

●キリストを受けとれば永遠の生命

「彼を信ずる者」とは、「彼を受けとる者」ということ。絶対にこの「信ずる」という言葉が我々にとって観念であつてはダメです。これはもうハッキリしている。この「信ずる」という言葉が観念になっているものだから、思い込みや、

「仕方がない。決断をもつて信ずる」

とか、そんなようなことでやっている。そんな信仰はその決断がにぶればダメになる。もう決断なんてものはいかに当てにならないかは、私は自分でも経験済みだ。

無教会の信仰のすじはいいのだけれども、どこか力が欠けている。内村鑑三、藤井武、塚本虎二は無教会での三大先生ですよね。だから、私はその集会に出て、今日はつまらなかったということはなかった。とにかく、あの先生たちは素晴らしい。けれども、それにもかかわらず、何かまだ本当のところでない。そこに無教会の限界があつた。その聖書の解釈は素晴らしいから、それで満足して、集会ごとに心の喜びをもつて帰った。まあ藤井先生の場合は、かなり私たちにはもちろんあるものが来ていたと思いますが、それでもなおダメなんだよね。それは先生方がどうのこうのと、先生方を言うのではない。とにかく、相対的に無教会の限界があつたというのは事実なんだ。それで、私は使徒的な信仰からズレをきたしている何ものかがあるということに気がついた。信仰という言葉が、本当の使徒的な意味における信仰になつていなかったわけです。いつも申し上げているとおり、

「信仰はただ仰いでいるだけではダメだ。その中に交わっている世界です。そして交わっていると、それが動的なところに、信、即、行というところに入ってしまう」ということです。

「彼を受けとる者が亡びないで永遠の生命を得るためである」

という。キリストという賜物は即、永遠の生命です。受けとれば永遠の生命。

「キリストの中へと信じ込む人は亡びないで永遠の生命を得る」

というわけである。必ずそういうことになる、ということ。受けとれば必ず永遠の生命を得る。何となれば、受けとれば、彼自身が永遠の生命となる。受けとれば、そのものが即ち永遠の生命であるからねという。「永遠の生命を得るためなり」というのは、

「受けとつてから、それから永遠の生命をだんだん得よう」



なんていう、そういう二段構えではない。ギリシア語を直訳すれば、多少そういうことにもなりましようけれども、私は文法の直訳よりも、その奥をつかんでいきたいわけです。

「私はキリストを信じた」

「そうですか。永遠の生命はありますか」

と、普通の教会や無教会の人に聞くと、「あります」と言うかもしれませんよ。けれども、それは信念しているだけで、現実には生きていない。

「死んでも死にませんよ」

と、ハッキリとそこに本当の現実性というものを持っているか持っていないかは、これは大きな差なんです。その差はいかにして生ずるかというわけです。なぜそこに差があるか。

「キリストを受けとつたら、誰でも一人も例外なしに永遠の生命である」

と。「すべての人が」と書いてある。「彼を受けとる者はすべて」、例外なしに。その世界は無条件だからね。

●罪意識の決定版は十字架

17 神その子を世に遣わしたまえるは、世を審かん為にあらず、彼によりて世の救われん為なり。

世は、神さまの眼から見ると、みんな審かれるんですよ。

「世界史は即ち世界審判史なり」

という。我々の姿は、あるがままの姿は審判にさらされている。けれども、独子を遣わしたのは、審かんためではなくて救うためである。神の明鏡に映してみたら、私たちは罪という黒い影、いや、黒い実体である。そこで、「罪、罪、罪、罪」と言う。

「キリスト教はもう、すぐに罪、罪と言うから、私は嫌だよ」

なんて言う人がある。それは一応ごもつともな話です。けれども、罪ばかりを見たつてしようがない。キリストは――「お前たちが罪をわかるために」なんて書いてない――「救わんがために」という。救い難き者であるということは、どうにも罪の中に、ドロ沼の中にあるから、だからこれを救おうという。救おうというのに、

「私はまだドロ沼の中です」

なんて、ドロ沼ばかり見ていてはしょうがないんだ、ドロ沼ばかりを見ていたら、本当の救いの手の中に本当に乗っかることをしない。

皆さんは、集会をして、「罪がわかりました」なんて誰も言いやしない。この御霊の生命の世界の喜びを一人ひとり感謝している。これはもう既に実験済みでありまして、このキリストの生命を受けとってみたらば、もう救われた世界が、永遠の生命の世界がなんと素晴らしいことか。もう罪なんて考えない。消えてしまう。そんなものは問題にしたって始まらない。「罪を問題にせよ」といつて福音は説いているのではない。



いよいよ生命の世界に入る。ということはもちろん、罪をいい加減にしてということではない。いかに罪が凄いものかは、我々が自覚するよりもハッキリとキリストの十字架が表わしている。十字架がハッキリ表わしているものを、自分のいわゆる人間的な自覚で、自意識でもって「罪、罪」なんて言ったって始まらない。罪意識の決定版は十字架なんですから。決定版は十字架で、罪の極限を言っている徴が十字架なんだ。我々の罪の極限はこの「神の子を十字架につけた」という、これがその罪の極限の事態です。

これがひっくり返って、その罪を全部、無罪放免にした。「ああ、どうもこの喜びは」というその世界をグングン歩いて行きなさい。もう闇の世界は見るな、顧みるなど。我々はもう自分の過去だの、自分の罪だのを感傷的に顧みることはいらん。ということは、

「でたらめをしてもいい」

ということではない。それはパウロが言う通り、生命の世界に、光の世界に入れられると、そういうことが自然に日々の世界から外れていく。闇を顧みたり、悪の世界を知る必要はない。

「まだまだ悪の世界の経験が足りないからもういろいろ経験してから」

なんてやっているうちに、悪の世界に取り込まれてしまう。そんな必要はない。

知らないまに光の世界に入っていれば、知らないまに闇に勝っている。闇を顧みて、罪を顧みて、罪に勝とうとしたって、これは勝てない。闇は見えない。光を見よ。そうしたら、知らないまに闇に勝つ。これが我々の人生の勝利の秘訣であります。サタンを見たら、サタンの虜になる。だから、

「試みに合わせ給うな」

という意味もそこにある。人間は、試みに合うと危ないから。けれども、たとえ試みに合っても大丈夫だというものがもちろん来るわけですから。

●絶対恩寵の赦し

そういうわけで、

17 神その子を世に遣わしたまえるは、世を審かん為にあらず、と。

「お前の罪はこうだ、過去の罪はこうだ、現在はこうだ、未来もこうであろう」

なんて、可能性まで言ってるね、そして、それを審こうと思ってるキリストが来るわけではない。マルチン・ルターが始め、キリストをそのように――当時のカトリックがそうでしたから――キリストを見ていたから、キリストの義というやつがおっかなくてしょうがない。いかにして自分は神の前に罪なき義人たりうるかと、一生懸命でやったところが、とうとう疲れてしまって、彼はぶっ倒れてしまった。

「そんな自力でいくらやったって、それはダメだよ。自分なんか見なさるな、自分



自身を明るくしていきなさい。明るくしていくためには、受けるものを受けなさい」ということです。それが「審かんためなり」ということ。神さまは、

「審判^{さばき}は、みんな私はキリストの十字架で見ているよ。お前さんの罪なんかはみんなここで見ているのだから。お前さんは直接見られたらかなわんだらう。そつぽを見ているから心配要らん」

と。それだけ絶対恩寵の赦しがあれば――

「ああ、そんなに赦されているのか。それじゃ、結構だから、悪いことをしてやろう」なんて、そんなやつは地獄へ往く――ハッキリしている。そういう結論にはならない。そういう論理にはならない。そこに福音の素晴らしいさがあるわけです。

道德の世界で一生懸命でどうのこうのとさんざんやって、まあいわゆる教育なんてものは――私は学校の先生をしているからわかるけれども――そんなことをしてもしょうがないですよ。なにもそれが悪いとは言わないけれども、もうひとつ奥の世界を本当に我々教育者が出せないと、そこから出発しなければダメだ。

それが「世の救われんため」である。救われ得ざるところの世を救う。望みなき世を救うのがこのキリストの絶対恩寵の世界です。だから、望みは、私たちは望みなきところになお望むことができるのは、この恩寵があるからです。希望は上から、恩恵が上から来ているから、希望が与えられているから、望むことができるわけです。

●愛の光の世界にいよいよ入って行く

18 彼を信する者は審かれず、

「キリストを受けとる者はもう審判の世界にはいない」と、ハッキリ書いてある。「審かれず」とは、

「彼を受けとる者は、その人の罪は見られない」

ということですよ。ありがたいです。ありがたいから、この清らかな愛の光の世界にいよいよ入って行きましょうというわけです。だから、

信ぜぬ者は既に審かれたり。

キリストを受けとらない者は即ち、それは既に彼を持ってないんですから、自分自身が何ものかになっているわけですから、受けとらないということ自身が実は審きの事態である。だから、信と不信と、救いと審きとがハッキリしている。現実において既に救いと、現実において既に審きとが強い。それは最後の審判に審かれるという終末の世界のことを今は言っているのではなく、現実のことを言っている。

神の独子の名を信ぜざりし故なり。

「名を信する」と言っても、それはもちろん空名でないことはもうご承知のとおり。

19 その審判は是なり。光、世にきたりしに、人その行為^{おこない}の悪しきによりて、



光よりも暗黒を愛したり。

ヨハネ伝の1章に書いてあるとおりです。キリストは光。このヨハネ伝では「光」とか「生命」ということが非常に出てくる。

「我は世の光なり」

と。太陽の光よりも素晴らしい光である。光中の光、本当の光がこの闇の世にやって来たのに、

「人その行為の悪しきによりて、光よりも暗黒を愛したり」

と。人間というやつは、テレビやなんかを見ても、暗黒の武器がたくさんある。いかに人間というものは――奇怪なものやグロテスクな、妙なものがテレビで出ている――サタン的なものがその中にある。人間なんてこれ不可解なるものかというくらいに、我々の中にはいろんな混濁したものが、不可解なものが交錯している。我々自身がドラマなんです。聖書がドラマであるが、我々自身が即ちドラマである。わがうちなるこのドラマチックな事態の、闇の力に対して光が勝たなくては。自分ではそう思っても勝てないと言っていることはローマ書7章にあるとおり。その罪をいつまで見たって何になるんですか。

キルケゴールなんていうのは、そこを余り強く言われて、まだ光の世界、歓喜の世界にまで行っていない。そこに彼の欠陥がある。ところが、ああいう妙な闇の掘り下げが好きなんだね、みんな。闇の掘り下げよりも大事なことは、光の世界を限りなく追求することです。光の世界で本当の霊格になっていくことが我々のこれからの課題である。

夜行性動物というやつはみんな奇怪な顔をしている。見てみると、ゾツとするね。夜行性動物というやつは光を嫌って夜になってから目が覚めて動き出す。見てみるとあれは怪物ですね。あんなのを小さい子どもに見せるのはどうかと思う。見せた方がいいけれども。今の世の中をみると、そういうものばかりを見せて、本当の光の世界を見せることをしない。そこに大きな欠陥があるわけです。なにも現実に対してただ目をつぶっているというのではないけれども。特に小学校の先生たちが、小さな魂を扱っている先生たちが本当の光の世界を、本当の義の世界を、本当の愛の世界を開示しなかったら、これはもうとんでもないことになる。魂がみんな傷ついてしまう。これは非常な責任がある。夜行性動物になったり。ミミズだって、モグラだって、一生懸命で闇の中に入ろうとする。太陽に曝されると大変だというわけだね。隠花植物なんてのも私は嫌いだ。日陰に置かなければ育たないなんて。

向日葵のごとく、光を愛して光に向かっていく。しかし、本来の人間はそういうものを持つてます。青空を見ると、

「ああ今日はいい天気だな」

なんて、やつぱり、光が好きなんだよね、人間は。向日性を持っている。その向日性をし――これは神の本願、私たちは神の似姿に本来創られているのだから――光に向かうよう



に、光を喜ぶようにできている。だから、本当の光にでつくわせば、あなた方も、

「他はどうなつても結構だ。この福音をいかにせん」

と言つて喜ばれたのが今夏の特別集会であつたわけです。これは本当に他のものをもつて奪うことができない。

「この喜びを奪うものなし」

と、キリストがヨハネ伝の16章で言つておられるとおりです。

「²²斯く汝らも今は憂^{うれい}あり、然れど我ふたたび汝らを見ん、その時なんじらの

心喜ぶべし、その喜^{よろこび}悦を奪う者なし。」(ヨハネ16・22)

「聖霊をもつて臨んでくるから、その時は君たちの喜びを奪うものはない」

と。

●闇を光に変える光

²⁰すべて悪を行う者は光をにくみて光に來らず、その行為の責められざらん
為なり。

そのとおり。

昨日は、私は総理大臣の記者会見をずっと聞いていた。総理大臣だけあつて、どう質問されても、うまく答えるものだ。けれども、結局それはうまく答えているだけで、普通の政治の限界ですよ。本当の政治をするためには、政治の限界の外に出た魂をもつて政治をしなくては。これが大乗的な政治で、そういう政治家はやはり人間が本当に突き抜けたところに來なくては。もう何をするにしても、突き抜けの世界に魂が來てないものは、何をしてても本当のところには來ないわけです。国際関係というものは、その奥に何か善きものを、人を本当に動かすものをその政治家が持っているか持っていないかは、これは大きな違いですから。人類は、イデオロギーはいろいろだよ。共産主義であろうと何であろうと構わない。イデオロギーの奥の世界に入らなくては。イデオロギーでは一つにならないです、人間は。みんな考えが違ふんだから。

けれども、もう一つ奥の世界、本当の人間性の世界、そこはどういう人種であろうとも共通したものがある。宗教もインチキでないかぎり、共通したものがある。その世界です。宗教は結局、人間の心の世界の問題ですから。その心の世界で本当に相手と共通するのに、ただ一つのものはこのアガペー的な愛です。本当にはらわたの底から――ただ手で握手するのではない――心の魂の握手をするような角度を持つようなそういう政治家。テクニクではない。そういう政治家でなければ、本当の離れ業はできないと思う。惜しいですな、そういう大人物がいない。政治の貧困だの何のかんのかと言うが、結局、人物の問題です。

これが光の世界。その光は闇を光に変える光である。闇を除外する光ではない。「敵」なんていう観念をみんななくしてしまう、雲散霧消してしまうところの光である。光は熱を



持っている。蛍光ではない。熱を持った光です。相手を暖める。光熱と言うが、熱をもった光。それは自然界で太陽が証している。太陽は熱と引力を持っている。引力と熱とを持っているこの太陽の光。こういうものが私たちの魂の中に、何を営む人の中にも、来ているか。そうすれば、することなすことがみんな本ものになっていく。そういう、誰もが与えることのできないものを福音は与えようとしている。永遠の生命とはただ時間的に永遠であるのではない。質的にそれを永遠としているかということ。

21 真をおこなう者は光にきたる、

と。使徒行伝10章34節から見ると、

「34 ペテロ口を開き言う、『われ今まことに知る、神は偏ることをせず、35 何れの国の人にても神を敬いて義をおこなう者を容れ給うことを。』」

この「神を敬いて義をおこなう」が即ち、「真をおこなう」と同じわけです。

36 神はイエス・キリスト(これ万民の主)によりて平和の福音をのべ、イスラエルの子孫に言をおくり給えり。37 即ちヨハネの伝えしバプテスマの後、ガリラヤより始まり、ユダヤ全国に弘りし言なるは汝らの知る所なり。38 これは神が聖霊と能力とを注ぎ給いしナザレのイエスの事にして、彼は遍くめぐりて善き事をおこない、

ここにも「善き事」とある。

凡て悪魔に制せらるる者を医せり、神これと偕に在したればなり。」(使徒行伝10・34～38)

「聖霊と能力とを注ぎ給いし」とある。ナザレのイエスは聖霊と能力において動いて、悪魔に制せられる者をみな癒してしまった。この場合の「癒した」というのは、魂と肉体のことですよ。霊肉渾然として救ったということです。

そういった具合に、「真を行う」ためには、キリストを受けとらなければ真を行うことはできない。キリストを受けとれば、もう既に光に来ておりますから、真が行えるし、また光に来る。まあこれは円環的な関係かもしれませんが。

その行為の神によりて(に在つて)行いたることの顕れん為なり。

と。その後ずつと、「バプテスマを施した云々」というようなことが書いてあります。

27 ヨハネ答えて言う『人は天より与えられずば、何をも受くること能わず。

28 「我はキリストにあらず」唯「その前に遣されたる者なり」と我が言いしことに就きて証する者は、汝らなり。29 新婦をもつ者は新郎なり、新郎の友は、立ちて新郎の声をきくとき、大いに喜ぶ、この我が歓喜いま満ちたり。

即ち、新郎なるキリストを迎えたから、私はうれしいが、

30 彼は必ず盛んになり、我は衰うべし』

キリストの前に自分は明星であつたが、キリストは太陽の如きものであるから、とてもそ



の光には及ばない。しかし、私の役割は、この太陽を導くところの星の如きものであったということです。

●上より来るもの

我々が今日、特にこれから学ばなければならないのは、それから後のことです。

³¹ 上より来るものは凡ての物の上^{きた}にあり、地より出づるものは地の者にして、その語^{こと}ることも地のことなり。天より来るものは凡ての物の上^{きた}にあり。

「上より出づる」というのはもちろん、空間的な上ではなくて、霊界のことです。ヨハネ伝の後の方に出てきますけれども、

「お前さんはまだ五十にもならないのに、『アブラハムよりも先にあつた』とはどういうことか」

なんて、イエスにそういう質問をしているところがある。

「実は、私はアブラハムよりも先にいたんだよ」

と。完全にキリストは神と共にあつた霊である。であるから、ナザレのイエスとして顕れても、完全に上からまさに降臨した。降臨したんです。なぜ、降臨と言うかという上から臨んできて誕生したから、降臨と言う。そして、キリストは常にその上なるもの、霊なる世界、神さまと交わっている。

仏教の方では上だとか超在的な神に対して、とかく、

「それはどうもお伽話^{とがわ}みたいなものだ。宇宙の大霊、根源というものはそういうことではない。宇宙の大霊に自分たちは即して悟らなくてはいいかん」

なんていうような、非常に哲理的なわけです。それももちろん真理です。けれども、この福音の世界では、聖書の宇宙の世界では、ハッキリと実在^{じざい}の神として実際につくわして経験される。キリストも神さまを「父よ」と呼ぶ実体として経験している。我々の五感を持っている相対的な現実の世界に、相対的な何らかの相対界に現象するようにして絶対者^{ぜつたい}が顕れた。それを「父」と呼ぶことは、お伽話でも何でもありません。それを「絶対者」と言おうが何と言おうがいいけれども。それを私たちの相対界における救いの現実として、ハッキリと「父」と言つて、それに呼びかけまつることができるといふことは、ある特定の人^{ひと}が悟りの世界に入るよりも、救いの世界がいかに無条件にこの地界に降りてきたか。イエス・キリストは霊界に在つたものが、我々と同じ姿で危機的存在として地上にいた。けれども、その危機的存在であるキリストの、

「私を見た者は父を見た」

という素晴らしい表現がある。これはお釈迦さんの悟りの世界よりもつと凄^{すご}い世界です。そういう意味において、福音の次元の素晴らしさ、その自由さというものが感ぜられるわけです。いつもキリストは上からきて、その上からの言葉をそのまま語ろうとしたつて、



語りようがないです、この上の世界は。それを相対界の言葉でもって語っている。

「人新たに生まれずば」

なんて。何のことだか分からない。だから、ニコデモはキリストと会話しても、とうとう、

「先生、あなたは神さまから遣わされた人で、神さまと共にいなければ、あな

たはこんなことはできません」

なんて、ただ外側から感心ばかりしている。自分がちつともその中に本当に入ろうとしない。入ろうと思っても入れない。どこまでも考えが下側からです。考えが下からで、結びつかない。むしろ、エックハルトが言うような身心脱落とか、自分から脱却するような経験をした神秘家の方がよほど上だ。

●聞くも語るも祈り心

32 彼その見しところ、聞きしところを証^{あかし}したもうに、誰もその証を受けず。

霊界において見、また聞いたこと、神さまから直接に見、また聞いていること、それを証している。だから、こつちからは分からないですよ、次元が違うから。分からないけれども、それを無条件に受けとる世界は祈りなんです。祈りなくしては、この世界には入ることができず、その世界を本当に把握することができない。聞くも語るも祈り心。この祈り心がないと、その「上より」という事態に交流することができないで、いつもただ上を観念しているだけの世界。これが交流するためには、これは祈りの場というものに自分を祈り心の中に入れていかなくては。そして、その言葉の響きを率直に受けとって、その響きの奥の世界の響きを聞くこと、奥の姿を見ることです。

ゲートという人は非常に見る人であった。シラーは、どちらかというところ、頭で考える人です。同じものを見ても、シラーは思索する。ゲートはものに即して即物的に思っている。その中を見る。その中を見るというのは、現象面をいい加減に見ているということではない。現象面を本当に見ている人はその中を見ていることになるし、その中を本当に見ている人は現象面が見えてくる。現象と本体とが即していくわけです。

たとえば、この信仰の世界もそうなんです。何か癒しということが起きるでしょ。そうすると、普通は、その癒しということに、神さまに癒されたということの現象だけにとらわれて、ただうれいという。それだけでは、そういう信仰はやがてダメになる。その癒しという現象において一体、本体の世界が何であるか。その現象において直ちに本体をグツとつかむ人は、その癒しという現象を本当に生かしてつかまえている人です。そういう人は動かない。

それは今度は私がいう、根元現象の世界です。根元現象の世界を魂の世界で受けとつていくと、そこからたといわゆる相対的現象面に顕れてこなくても、そんなことに支配されなくなる。これが本当の信の世界です。自分の悲願以上の霊願を見ている。本願を見て



いる。本願を受けとっている。本願を受けとっている人は、その現象面にとらわれない。

「ああ、現象すれば、それで結構。現象しなくても結構。どちらでも結構でございます」

と言って、その奥の素晴らしい世界から、今度はいわゆる現象以上のことが現象する。そういうような魂になってきたら、これはもうしょうがないです。これが本当の、御利益でなければ観念でもないところの、まさにヨハネ伝が伝えるところの真理の世界です。パウロが一生懸命で構造をもつて語っているところのものです。

●十字架は霊界に入るときにの関門

上から来るものはすべてのものの上にある。霊界から来ているものは一切のものに支配的である。だから、

「人新たに生まれずば」

という。これはもうしよつちゅう言っているから、皆さんはすぐお分かりのとおりです。その関門があるんだから。十字架という門を通つて、この「新たに生まれる」世界に、霊界に入つて行く。霊界に入るときにの関門はこれですから。この門を透得すれば乾坤自由自在ということになる。これはただ自分の罪なんてものをただ見ているのではないですよ。キリストのこの焦点を通つてその世界に入れば、我々もその中に、霊において生まれたもの、「上から生まれたもの」になるわけです。

「彼その見しところ聞きしところ」

即ち、我々はその根元現実、絶対空間といいますが、そういった霊的空間の中に入るか、霊的時間の中に入つてしまふ。そうしたらば、もうキリストの言葉が、パウロの言葉、ヨハネの言葉、ペテロの言葉が、御霊から来てますから、ピンピン響いてくる。

³³その証を受くる者は、印して神を真なりとす。

もうハッキリと印せられてある。御霊によって印せられていることです。

³⁴神の遣し給ひし者は神の言をかたる、神、御霊を賜いて量りなければなり。

御霊は計量できない。だから、「無量霊」と書いたわけです。

私は法華経をまだ本式に読んでいないからあれですけども――そのうちに勉強したいと思つていますが――法華経の中にあるそうですね、この「無量寿」という言葉が。仏教の世界でも「無量寿」という言葉がある。量ることができない寿だから、これは「永遠の生命」でしょ。「仏教には永遠の生命がない」なんて言つたつて、そうはいかん。ただ、その質が、キリストの場合とそれはちよつと質がどうかと私は思うんですが。

「無量寿」という言葉と「無量光」という言葉がある。量ることのできない光。

「寿は即ち如来の体であり、光は即ち如来の用である」

なんて書いてある。「体」と「用」。本体面と、こちらは活用面、現象面だね。本体面が寿で



あり、現象面が光である。要するに、「阿弥陀^{アマミダ}」という言葉。「無量寿」というのは「アミターユス」といい、「無量光」というのは「アミターバー」という。「アミターユス、アミターバー」が「阿弥陀」ということ。「阿弥陀」という言葉は実は、「アミターユス、アミターバー」に展開できるようなわけなので、即ち、「阿弥陀」は「無量寿にして無量光なるもの」ということです。「仏」というのは「ブツダ」即ち「覚者」、悟りを開いた者です。だから、「阿弥陀仏」というのは、「無量寿無量光のものが悟りを開いた者」即ち、「キリスト・イエス」と同じような言い方になる。「無量寿無量光」が「キリスト」になるわけです。「仏」というのは「イエス」という現実の、本当の覚者だね。福音の世界の覚者がイエスです。もしアナログヤ(類推、類比)でいうなら、そういうことになる。

本当の宇宙の大霊と一如の世界になるような、雄大な、「釈迦牟尼」というのが現象したわけです。釈迦牟尼が現象した。だから、これは「ロゴス」なんだ。「ロゴス・クリストス」が「サルクス・クリストス」になったと同じような構造にやはりなっているんだ、仏教でもね。即ち、永遠の生命であり、量ることのできない光である。お釈迦さんが阿南に、

「無量寿仏は一元無極」

と言っている。一元で極まり無いと。やはり無という言葉が盛んに出てくる。その神々しさは、根元は――へブライ語でいうと「カードーシュ」です――それが極まりないものである。無量光仏だとか、いろんな言葉がある。無対光仏、相対を絶したものの、絶対となると無対という。無対の光の仏。清浄光仏、清らかなこと。歓喜光仏、喜びです。不断光仏、その光は絶えない。難思光仏、それは思うことが難い。とても思うに思えない。

「いかに神の知恵は量り難きかな」

とパウロが言った。無称光仏、称え難い。もはや人間の側から何と言おうがどうにもならない。日光光仏なんて面白い言葉がある。日月を超えたところの光。黙示録の終りに

「もはや日月の照らすを要せず、キリストが即ち光である」

と書いてある。みんな非常に似たようなことが書いてある。本当の光の世界は本当の如来の世界です、これを受けとつたらば、御霊を受けとつたらば。この

「神、御霊を賜いて量りなきなり」

という言葉は非常にいい言葉です。私たちには、御霊を賜いて量りない。無量なんです。無量霊です。だから、「これでいい」なんていうところはひとつもない。

「限りなく、喜びより喜びへ、光より光へ、ついにキリストの姿に化する」

と、パウロが言った。本当の知恵も力もみんなここから出てくる。この永遠の生命です。

●無量寿無量光とは聖霊が充滿している事態

「甦り」という言葉がちよつと躓きですね。死んだ者が「甦る」というと、何かちよつと息を吹き返したように思うなら、とんでもない。キリストの死というものは、我々の相対



的な死とは違う。よく神学者が言うんだよ、

「死は断絶である」

なんて。切断だとか、断絶だとか。バルトのまねをしている。キリストは、断絶なんかしてやしない。彼の死はもちろん死です。けれども、それは贖罪の死であって、その他の何ものでもない。死ぬ人ではないんだから。無量寿を持っている方なんです。彼のいわゆる甦りというものは、御霊が本当に霊体を着て現われた。幽霊でも何でもありません。それがまた霊体に完全に戻ったんです。そういう、盛んなる霊の無量寿無量光の事実。この無量寿無量光の事態が即ち、聖霊が本当に充滿しているところの事態です。神の霊が充滿しているところの事態が即ち無量寿であり、それが自由自在に働くのが無量光の現象面である。それは光をもって、熱をもって人を生かす。救い上げてしまう。霊肉渾然として救い上げるところの事態である。

それを別な言葉でいうと、その光は義であり、愛である。義の光であり、愛の光である。義光であり、愛光である――そんな言葉はないけれども――これは自然現象の光とはちがう。これは何とも名状することのできないものである。歓喜そのものであるし、清らかなものである。いわゆる自然現象の光とはおよそ超えたところの光である。それがナザレのイエス・キリストの、身証したところの言葉であり、その全実存であり、その行為である。その言葉は同時に、その行為は無量寿無量光の発したところの事態である。

だから、そっち側に自分を投げ込まないかぎり、受けとれないことはもうハッキリしている。下からでは。上なる人にならなくては。パウロが「内なる人」とか「新しき人」とか言っているが、もうひとつヨハネ的に言うなら、「上なる人」にならなければダメだ。上なる人、内なる人、新しき人。そういうのが霊人です。御霊の人です。御霊の人をもしそういうった言葉でいうなら、御霊の人は上なる人、内なる人、新たな人です。

そうすると、この福音の現実のみなそのような現実である。この世の他のものとは代えられないんです、この現実のありがたさは。

「これから永遠の生命を受けとる」

ではないですよ。既に来たりてある。だから、いよいよ光となる。既に生命である。いよいよ生きなさいと。これは律法でも何でもありません。喜んですすめている言葉です。

「はい、そうなつていきます。大いにいろんなことで鍛えてください」

と。それは大丈夫、推進力があるから。追求してやまない。何となれば、追求する原動力が来ているから、追求してやまないのである。追求無限と言ったのは、このパウロの中に御霊が来ているから、パウロは追求してやまなかった。楽しくてしょうがない。追求せざるを得ない。

これが、私たちが福音の世界に入ると、法華経の――さつき私はちよつと他の本でかじったわけですけども――いろいろ言われていることがスラスラと読めてしまうわけです。



「ああ、そうでしょう」と、キリストの光では楽にそれが受けとれてしまう。なにも悟りを開かなければ読めないわけではない。しかし、法華経というのは非常に庶民のために、ちょうど歎異抄みたいに、ルターの「キリスト者の自由」みたいに、一番お経の中では読みやすいのだそうですが、ある人に言わせると、

「法華経は実はヨハネ的キリスト教の影響を受けている」

というようにことも言われているくらいです。もしそうであるとするならば、なんとこの福音のキリストは実は歴史的にも光を与えているか。お釈迦さんが法華経を編んだわけではないから。後からお経ができた。

こないだちょっと、蕪村の俳句を読んでいたら、

「裸身に神うつりませ夏神楽^{かぐら}」

というのがある。夏の暑いときに川でみそぎをする。そのことを「夏神楽」と言ったそうですが。裸になつてみそぎをやる。夏の庶民の中に、自分を本当にとつぷりとその世界に投じれば、その裸に神がうつる。私たちも本当にキリストの御霊のバプテスマの中にみそぎするならば、「神うつりませ」という。神さまがうつってくる。なんとすれば、聖霊を宿せば、神の生きる姿になる。みそぎは単なる水のみそぎではもちろんダメですが。そういう聖霊のバプテスマです。

ここにもバプテスマのことが出てます。キリストが水のバプテスマをなさったことが書いてある。やったっていい。けれども、キリストの場合はいつも、この水を通して――聖霊は水をもつて譬えられる。3、4章に出てくるとおり――このキリストのように、水のバプテスマが実は霊のバプテスマで、そうしたらば、御霊が来れば、この裸に神がうつるということです。何も着飾らない私たちのあるがままの姿に神がうつるということでもあります。

「何事も言うべきことはなかりけり問わで答うる松風の音」

何も言うことがなくなってしまうが、問わないのにちゃんと答えてくれる松風の音と。何ごとも言うべきことはなかりけり。もう絶言の世界になって、「問わで答うる松風の音」と。松風の音を聞きながら、もう福音の聲がそこに響いているというような消息。そういった本当に限りなき現実ですね。「これから」ではありませんよ。

そういうことで、皆さんも、いよいよそういう本当の底光、底力のクリスチャンにだんだん鍛え上げられていきましよう。

